

市史だより

Gači-majaa

第9号・2006年5月31日(水)発行

年3回 (5・9・1月発行)



編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係

〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先



☎ (098) 893-4431

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp



嘉数高台から望む普天間飛行場

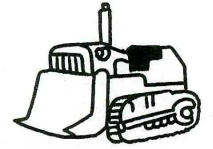
1945（昭和 20）年 4 月 1 日、沖縄本島中部の西海岸に上陸した米軍は、日本軍が建設した北（読谷）・中（嘉手納）飛行場を占領した後、補修を行い使用しました。こうして米軍は、日本本土への進攻基地として沖縄に軍事基地を次々と建設しました。

「鉄の暴風」と呼ばれる激しい戦闘によって、多くの住民が犠牲となりました。その一方で、生き残った住民は難民として、各収容所を渡り歩いていました。米軍による土地の解放はなかなか進まず、住民は収容所からの移動を許可されても、米軍が指定した土地に住いを構え、かつての居住地への立入りを禁じられた地域もあります。宜野湾市においても、普天間飛行場とキャンプ・ズケランなどの軍用地として、戦前の居住地を接収された^{あざ}字もみられ、戦後はかつての住まいから、他の部落への移動を余儀なくされた字もあります。さらに、新たに住み始めた土地であっても、米軍が必要とすれば再び接収されることもありました。

このように、基地は私たちの生活に大きな影響を与えてきました。そして、戦後 61 年目を迎えた現在でもなお、基地と向かい合い続けています。



銃剣とブルドーザー、伊佐浜の土地闘争



■沖縄一の美田

国道 58 号を伊佐から普天間方面へと向かうキャンプズケラン(米軍基地)の一角には、かつて田園地帯が広がり、「沖縄一の美田」と呼ばれていました。今から約 50 年前、この伊佐浜一帯(伊佐・安仁屋・喜友名・新城)では米軍による土地の強制^{せつしゅう}接收と、接收に対する人びとの闘いがありました。

1953 (昭和 28) 年 4 月、米国民政府は「土地収用令」を公布、新規土地接收に乗り出し、軍は真和志村(現那覇市)の安謝・天久・銘苅、読谷村の渡具知、小禄村(現那覇市)の具志の土地を次々に接收していきました。1954 (昭和 29) 年 1 月、アイゼンハワー大統領が沖縄基地の無期限保有を宣言、米国民政府は軍用地料の「一括払い」を公表しました。これらに対し沖縄住民は激しく反発し、立法院は「土地を守る四原則」(*)を決議^{けつぎ}、以降この四原則をスローガンに土地闘争が展開されていきました。

■「円満解決」と婦人たちの決起

1954 年、流行性脳炎^{ばいかい}を媒介する蚊の発生^{はっせい}の防止を表向きの理由に、米国民政府は伊佐浜一帯での稲の植え付け禁止を命じました。伊佐浜一帯はすでに軍用地に組み込まれていましたが、住民は黙認耕作地^{もくにとんこうさくち}として戦争によって荒れ果てていた土地を耕し、生活を軌道^{きどう}に乗せ始めていました。伊佐浜住民の代表と宜野湾村長は、琉球政府に接收中止^{ちんじゅう}を陳情しましたが、米国民政府はこの要求を退け、さらに接收予定地 13 万坪を A・B・C の三地区に区分けし(図面 1)、段階的に接收することを明らかにしました。



図面 1 「軍関係書類綴 1953 年度」より

米国民政府の強硬な態度^{きやうこう}に、村側が争点を保障条件へと移していくなかで、接收中止を訴える伊佐浜住民は徐々に孤立^{こりつ}していきました。やがて伊佐浜住民は、不本意な^{だきよう}妥協へと追い込まれ、伊佐浜代表も海岸の干拓地^{かんたくち}を伊佐浜住民の代替地^{だいたいち}とすることで伊佐浜立退きを「承諾」^{しょうたく}、ただちに軍は伊佐浜接收問題の「円満解決」を発表しました。

この「円満解決」に対し、真っ先に異議を申し立てたのは伊佐浜の婦人たちでした。ある婦人は「金は一年、土地は万年というっており、私たちはほしょうなんか問題にしておりません。土地は汲んでも汲んでもつきない泉です。土地がとりあげられたらわたしたちは死ぬのです」(『戦後初期沖縄解放運動資料集 第2巻』より)と、接收反対を訴えました。

伊佐浜の婦人たちの陳情に対し、立法院は軍に対し再び接收中止を陳情しました。こうして婦人たちが閉ざされた状況を切り開いていくなかで、1955（昭和30）年1月13日の朝日新聞には「米軍の『沖縄民政』を衝く」という特集記事が掲載されました。この「朝日報道」によって、米軍統治下の沖縄の実情が国内外にも伝わり、支援の輪も広がりを見せました。

■銃剣とブルドーザー ～ 島ぐるみ闘争へ

1955年3月11日、軍のブルドーザーが伊佐浜“A地区”を皮切りに、土地の接收を開始しました。住民はブルドーザーの前に座り込んで抵抗しましたが、銃剣を手にした武装兵が出動し、座り込む住民に銃口を向け、住民を追い出しました。

この際に、72歳の男性が米兵に殴られ失神するなどの事態も発生しました。その光景を、伊佐浜のある女性が次のように書き記しています。「無力、無抵抗のわれわれ農民にたいして、アメリカ軍がおこなった暴力行為は、われわれは永久に忘れることができません。銃剣を突きつけて、うろたえる女子供を、田んぼにとってなげる沖縄戦さながらの光景でございました」（『望郷』より）。



反対する人びと 1955（昭和30）年7月

伊佐浜とほぼ同じ時期、伊江島でも土地接收が強行されました。抗議集会が各地で開かれ、人びとは互いに交流を深めていきました。軍の強権と「沖縄戦さながら」の暴力に対する人びとの生活を守る闘いは、地域を越えた広がりを見せ始めました。1955年7月19日、米軍が再び伊佐浜の土地接收を強行した時も、各地から支援者が駆けつけました。「銃剣とブルドーザー」によって伊佐浜の土地は奪われ、住む場所を失った32戸、住民約140人のなかには、インヌミヤードウイ（現・沖縄市高原）やブラジル、ポリビアへの移住を余儀なくされた人もいました。しかし、伊佐浜の土地闘争にみる人びとの決起と抵抗の広がり翌年の島ぐるみ土地闘争へと発展し、沖縄戦後史における一大転機となりました。

☆一口メモ

*土地を守る四原則とは…一括払い反対、適正補償、損害賠償、新規接收反対、以上4つのスローガンを掲げた。

展示会を開催しまあ～す!!

写真パネル展「伊佐浜の土地闘争」（仮）の案内

★いつ：6月19日（月）～30日（金）*土日と23日（慰霊の日）はお休みです。

★どこで：宜野湾市役所本庁1階ロビー

★内容：写真パネル等を用いて、沖縄戦から伊佐浜の土地闘争までを振り返りたいと思います。

みなさまのご来場をお待ちしております♪

カー！

～ 其ノ三 カーにまつわる昔話 ～

前号では、カー（湧き水）のタイプ（形態）について紹介しました。カーには、水の出口の地形や環境に適したカーが作られたことがおわかりいただけたと思います。

さて、今回は、宜野湾市内に残るカーにまつわる昔話をいくつか紹介しましょう。

■シマヌカー（写真右）

普天間飛行場内にある新城のカーで、アラグスクガーとも言います。このシマヌカーの発見について、『新城誌』（字新城郷友会 2000 年）によれば「新城原^{アラグスクガル}に移り住み、飲み水に^{きゆう}窮していた村人は、部落東南約 300 メートルにあるマヤーアブのくぼみから猫が水にぬれて出てくるのを見て、そのくぼみの中を流れる水脈を探し当てた。部落の東南 150 メートルほどの位置に苦労して掘り当てた泉がシマヌカーである」とあります。



■メーヌールガー（写真右）

愛知にあるカーです。ヌールは、ノロとも言い、かつて地域の^{まつりごと}祭事を執り行い、神様に作物の豊作や地域の繁栄等を祈る役目を担っていた女性をいいます。宜野湾には、かつて宜野湾ノロ・真志喜（謝名）ノロ・野嵩ノロの 3 人がおり、1 人のノロにつき数か所のムラ（字）を治めていました。このメーヌールガーは、宜野湾・神山・喜友名・伊佐・嘉数・我如古の祭事を治めていた宜野湾ノロが使用していたというお話が伝えられています。



■ムイヌカー（森川）

真志喜の森川公園内にあるカーで、羽衣伝説が残るカーです。天女と奥間^{ウフヤ}大親との羽衣にまつわるお話で、後に彼らの子どもである^{さつと}察度が

この他にも、犬が見つけたと言われるインガー（字宜野湾・普天間飛行場内）もあります。

歴史の中でみると、昭和初期から 1960 年代まで那覇市の水源は、大山の数か所のカーから引いていました。将来は、この大山のカーの水量の多さを語る昔話になるかもしれませんね。



こちめい 古地名調査はじめます♪

6月になりました！2006年も折り返しの時期ですね。4月に学校や職場などで、新しい生活を迎えたみなさんは、環境にも慣れてきましたか？市史編集係では、今年度から新しい調査を開始します。その名も「古地名調査」！！古地名と聞いて、ピンとこない方も多いでしょう。古地名とは「その土地の人々に、古くから言い伝えられている地名」のことです。

例えば、沖縄戦や普天間飛行場建設のため大半を失い、現在では見ることはできなくなったジノーンナンマチ(宜野湾並松)は、戦前の宜野湾では、シンボリックな存在として有名ですね。

また、キャンプズケラン内にあった、普天間部落と安仁屋部落を結ぶアヒラービラ(あひる坂)という道には、ある言い伝えがあります。それは「アヒラービラはモアアシビ(毛遊び)*をおこなう場所で、そこでは北谷の青年たちが普天間の女性を待っている間に、眠ってしまい、アヒラー(あひる)に噛まれてマブイ(魂)を取られて



ジノーンナンマチ

しまうことがよくありました。ある時、頑丈で勇気のある人が、そのアヒラーを捕らえて自分のタオルで松の木にくくりつけると、それはなんとミシゲー(しゃもじ)になった」という言い伝えです。あひるのお化けが出るアヒラービラは、大人も子どもも怖がって、夜は歩きたがらなかったそうです。



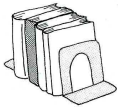
その他にも、真志喜では戦前、字宜野湾にあった小学校に向かう道をガッコウミチと呼んでいたりと、大山では国頭へ向かう畦道^{あぜみち}をクンジャンアブシと呼んでいました。

またカー(湧水)の名前やガマ(洞窟)の名前、拝所^{あざみ}の名前やハルナー(原名)なども立派な古地名です。みなさんの生活の中で何気なく呼び合っている地名が古地名だったりするんですね。



クンジャンアブシ (大山)

このように地名についての名称や由来、昔話を、教えていただきたいと思っています。今年度は宜野湾・神山・普天間・新城・安仁屋の5カ字の調査を予定しています。みなさまのご協力を頂けますようお願いいたします。



市史のお仕事ってなあに？ Part.2



みなさんは、市史編集係のお仕事について覚えていますか？市史編集係では、『宜野湾市史』の編集作業を中心に、様々な業務を行っています。ここでは、以前に紹介した宜野湾関係資料の整理 Part.2“行政文書の整理”についてみていきたいと思います。

★行政文書の整理とは？

宜野湾市役所内の各課から保存年限（保存期間）の過ぎた個人情報にかかわる文書以外で、将来的に宜野湾市の歴史を示す廃棄文書（これを歴史的文書といいます）を市史

☆「廃棄文書登録データリスト」とは？

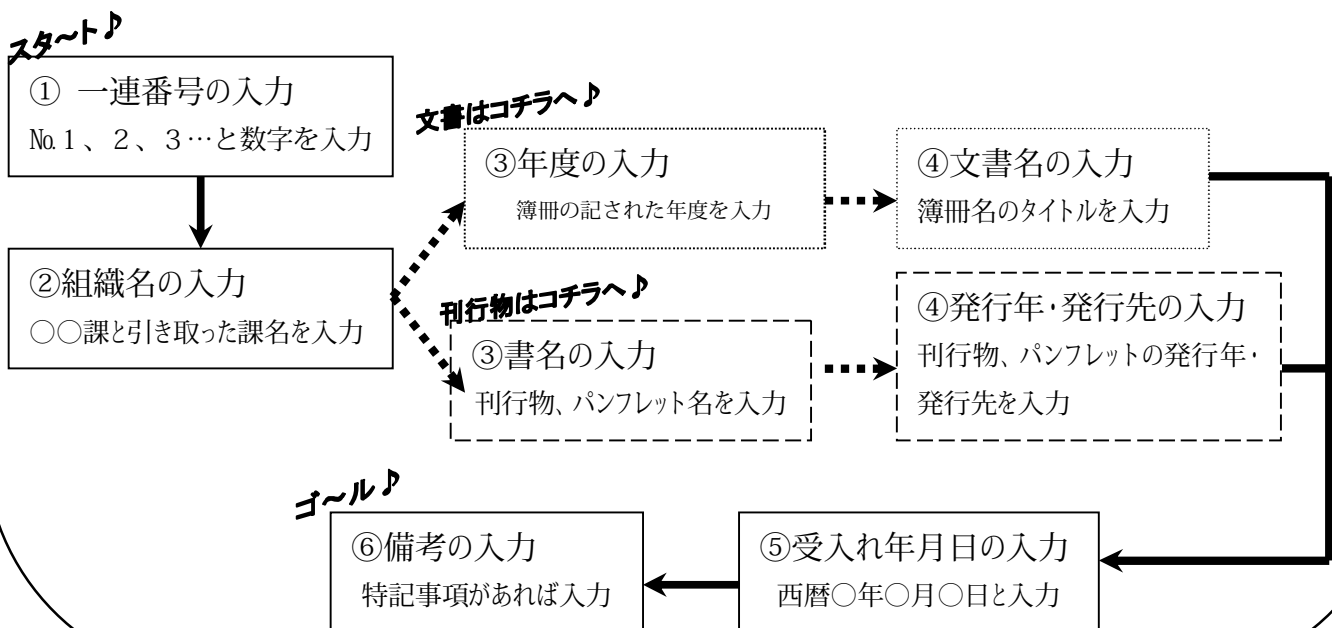
廃棄文書登録データリストには、簿冊（ファイル）に綴られた「文書」と、刊行物やパンフレット（国・県・他市町村等）などの「刊行物」があります。

☆どんな「文書」「刊行物」があるの？

「文書」には、年度によって課名の変化がありますが、行政管理課、人事課、福祉総務課、企画調整課、環境対策課、商工観光課などの会議録や一般文書があります。「刊行物」では、県内外からの観光、産業関係の案内や、展示会、まつりなどのパンフレットなどがあります。廃棄の対象となったこれらの文書、刊行物を引き取り、目録をパソコンで作っていきます。

☆パソコンで目録をつくる !!

廃棄の対象となり、引き取った文書・刊行物をデータ化し、廃棄文書登録データリストを作成します。その際、文書の簿冊（ファイル）、刊行物やパンフレット（国・県・他市町村等）を単位ごとに入力していきます。例えば、No・組織名・年度・文書名・受入れ年月日、特記事項などを入力します。





☆目録をつくったあとの行政文書は？

廃棄文書登録データリストとして入力した「文書」と「刊行物」を保存箱に詰め、箱番号のシールと、文書の目録データを張り、箱を開けなくても中身を確認することができます。こうして、登録を終えた行政文書は、宜野湾市民会館の地下に保管しています。

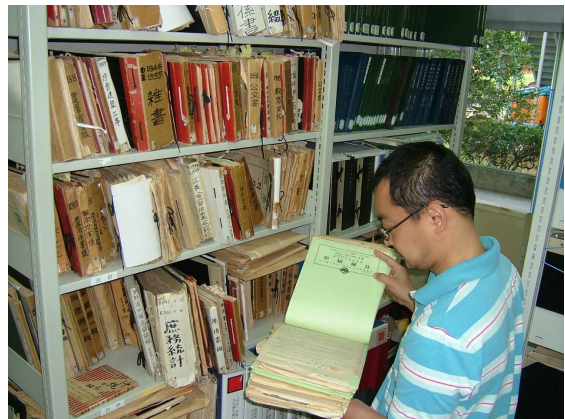
突然ですが…♪

みなさんは、2000（平成12）年7月に開催されたサミットについて覚えていますか？日本で初めての地方開催となった、『九州・沖縄サミット 沖縄首脳会合』は、2000年7月21日から23日の3日間、沖縄で開催されました。



今回、引き取った「サミット関係文書」という文書を見てみると、そのなかには、サミットと関連して、宜野湾市内の小中学生や宮崎県東郷町（現・日向市）の子供代表、外国の小中学生などが参加して、「国際平和子供サミット in ゐのわん」が開かれたことが報告されていました。さらに、サミット参加国への県と各市町村の国別対応の動きや、様々な事業の取り組みについても記されていました。この文書から、宜野湾市と沖縄県、さらには世界各国とのつながりを知ることができます。このように、廃棄文書を選別する際には、宜野湾市と県や国とのやりとり、宜野湾市の政策、基地対策、災害対策、戦時・戦後、文化財に関する文書など、宜野湾市の様々な事柄が読み取れる文書を収集しています。

また、市史編集係には、戦後間もない頃から現在までの行政文書を数多く保存しています。そのなかでも、戦後間もない頃の文書を活用して、現在、『宜野湾市史』第8巻 戦後資料編の編集に取り組んでいます。これらの文書を読みこなすことで、戦後の宜野湾市の歴史や、人びとの生活のあり様などを明らかにしていくことを目指しています。



おわりに♪

廃棄文書を種々選択して集めた簿冊（ファイル）の数はとても多く、チェックに時間もかかり、保管する場所の確保など問題もあります。しかし新聞同様に、パソコンでデータ化することにより、廃棄行政文書の利用やレファレンスがスムーズに行えるようになります。このような作業の積み重ねによって、数十年後に行政文書をひも解いてみると、宜野湾市の歴史をたどることができます。それだけに、行政文書は貴重な歴史的資料なのです。



我如古のサングワチャ〜♪



去る4月29日(日)に我如古公民館で「サングワチャー」が開催されました。サングワチャーとはどのような行事なのでしょう？現在のサングワチャーについて、紹介します。

戦前のサングワチャ〜♪

旧暦3月3日は、^{サングワチサンニチ}三月三日や^{ハマウリ}浜下りと呼ばれる行事が県内各地で行われ、女性たちは浜に下りて、潮干狩りをして遊ぶ姿もみられます。その日は、女性たちが日頃の農作業などを休み遊ぶための行事でした。一方、宜野湾では、その日を「三月」と呼び、戦前、大山や字宜野湾などでは、14、15歳以上の女性が大い屋敷に集まり、踊りをして楽しく過ごしました。なかでも、サングワチャーの日に踊られる我如古のスンサーミーは有名で、近くの村々からも見物に人びとが集ったそうです。戦前までサングワチャーは、^{クンジー}紺地の緋に帯を締め、^{ムラヤー}晴れ着に身を包んだ独身の女性を中心に行われました。村屋(現・公民館)の側に生えていた^{ガネコヒラ}我如古平松の前に女性たちが裸足で一列に並び、三味線の音に合わせて、円を作りながら、四つ竹を持って踊ったり、手踊りをしたそうです。

現在のサングワチャ〜♪

サングワチャー当日、我如古公民館には、開演前から我如古の区民や見学者の方々が続々と集まりました。現在、サングワチャーの踊り手となる婦人会のみなさんも、^{カジマヤ}紺地の緋を身に付けて、1曲目にスンサーミー、2曲目に花^{ナチジン}又^{クニブ}風車、3曲目に^{ひろう}今^ニ婦^ニ仁^ノ又^ノ九^ノ年^ノ母^ノが三味線で演奏されると、円を作りながら、音にあわせて四つ竹を打ち鳴らしたり、手踊りを舞台の上で披露しました。見物に訪れていた我如古のおばあちゃんからお話を聞くと、「若い時は踊ったねえ〜♪」と、踊りに合わせて手拍子をしたり、曲を口ずさんだりと、懐かしんでいる様子でした。



いよいよ本番の日を迎え、スンサーミーを披露する婦人会のみなさん



婦人会のみなさんは、スンサーミーの他にも数曲、

婦人会のみなさんは、サングワチャーの行われる20日前から、公民館で每晚練習を重ねて本番を迎えました。本来、旧暦3月3日に踊られていたサングワチャーは、仕事も抱える婦人会のみなさんの都合によって、時期をずらして催されています。そして、無形文化財として市から指定されているスンサーミーは、婦人会のみなさんによって、現在でも大切に伝承されています。婦人会の大きな行事であるスンサーミーは、多くの区民が顔を合わせ、親睦を深める場となっているようです。来年のスンサーミーも楽しみですね♪